

## りんご腐らん病の発生が多い

～ 樹体検診を実施し発病部位を除去しましょう ～

### 1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

近年、本病の発生は増加傾向にあり、本年4月中旬の巡回調査における発病樹率は3.9%（平成2.0%）で高かった（図-1、表-1）。

今後、気温の上昇に伴って病斑の進展が急速に進むとともに、果柄等への感染が増加し、次年度以降の発生量が多くなると予想される。このため早期に樹体検診を実施し、発病部位を除去し菌密度の低下を図る必要がある。

### 2. 防除対策

1) 樹体検診を実施し、早期発見と適切な処置に努める。

発病部位はアメ色に変色したり、上部が発芽しなかったり、枯死する場合がある。また、枝腐らんが集中している場合は近くに伝染源の胴腐らんがあるので周囲をよく観察し適切に処置する。肥培管理の不良や樹勢低下なども多発要因となるため、適正な栽培管理と総合的な防除対策を講じる。

2) 胴腐らんの処置

胴腐らん（図-2）は病斑外周の健全部にも菌が進展しているため、健全部を含め紡すい状に大きく、木質部に対して垂直になるように削り、塗布剤（トップジンMペースト又はバッチレート、成木の場合はトップジンMオイルペーストも可）を塗る。削り屑は放置せず直ちに処分する。

泥巻きは病患部を削り、水を加えて団子状にこねた泥で覆い、ビニールなどを巻く。

前年に処置した部位は治癒状況を確認し、治癒していない場合は再度処置する。

3) 枝腐らんの処置

枝腐らん（図-3）は見つけ次第剪去し焼却する。剪去後の切り口には塗布剤（トップジンMペースト又はバッチレート）を塗る。

4) 果柄感染対策

ふじは摘果時期が遅くなると果柄が残りやすく感染リスクが高まる。落花10日後頃までに摘果すると果柄が自然落下するため感染を防ぐことができる。摘果剤の利用も有効である。また、落花20日後頃にトップジンM水和剤1,500倍、ベンレート水和剤3,000倍液のいずれかを散布する。

### 3. 資料

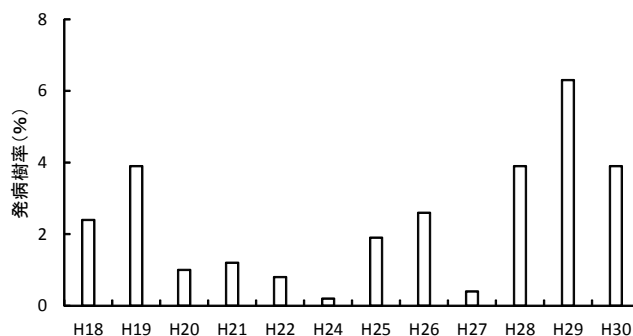


図-1 4月における腐らん病の発生推移

表-1 腐らん病の発生状況(4月中旬)

	発病樹率(%)			胴腐らんの発病樹率(%)			枝腐らんの発病樹率(%)			発病地点率(%)		
	H30	平年	概評	H30	平年	概評	H30	平年	概評	H30	平年	概評
	県北部	9.6	4.8	多	0.4	0.4	並	9.6	4.5	多	37.5	43.9
中央・県南部	0.7	0.6	並	0.6	0	多	0.1	0.6	やや少	14.3	13.0	並
全県	3.9	2.0	多	0.5	0.1	多	3.6	1.9	多	22.7	23.7	並



図-2 胴腐らんの発病状況



図-3 枝腐らんの発病状況 (果柄感染)

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660  
 秋田県果樹試験場 TEL 0182-25-4224  
 かづの果樹センター TEL 0186-25-3231  
 掲載HP <http://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>